

説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、
皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

今日の物語の舞台はエリコです。エリコと言えば旧約の時代、モーセの後継者ヨシュアが約束の地カナンに入る際、関の声をあげて城壁を崩したという劇的な神の勝利の地、約束のカナンの地へようやく足を踏み入れたシンボルの町でした。

イエスという名前はヨシュアというヘブル語がギリシャ語化した名前です。約束の地へと導く指導者、新しいヨシュアである主イエスのエリコ入城は、人々に大きな期待と興奮を生み出したことでしょう。

この一年、マルコ福音書を学びながら、何度かマルコの特長としてサンドイッチ構造があることをお話し致しました。今日の盲人バルティマイの物語も、実はサンドイッチ構造の一部を担っています。サンドイッチと言えば、パンとパンの間に具が挟まっている訳です。では、最初のパンはどこかと言えば、77 頁、8:22～26 のベトサイダでの盲人の癒し物語です。そして今日の盲人バルティマイの物語がもう一方のパン。ですから二つの盲人の癒しの物語に挟まれる形で、サンドイッチの具として 8:27～10:45 までが描かれている。

次に、この具の中に詰まっているのは何かと言いますと、最も大切なのが、3 度に亘る主イエス・キリストの十字架と復活の予告です。この中で、ペトロの信仰告白がなされ、山上での変容が起き、主イエスに従う道とはどういう道であるかがくり返し教えられてきたのです。しかし、その教えをさっぱり弟子たちは理解することが出来なかったのです。そのことを象徴的に際立たせているのがサンドイッチのパン。つまり二つの盲人の癒しの奇跡物語なのです。

バルティマイはエルサレムへ向かう街道沿いの道端に座っておりました。なぜなら彼は「物乞い」だったからです。道行く人からの憐れみを得ながら彼はその人生を生きてきました。今日の日課の最初と最後に「道」という象徴的な言葉が出て来ます。「道」、それは勿論、エルサレムへと向かう街道を意味します。しかし、私たちの人生という道をも象徴している。そして更に言えば、この道は主に会い、招かれ、その御後に従っていく信仰の道であり、その道はエルサレム、ゴルゴタへのヴィア・ドロローサへと重なっていくのです。

バルティマイは、道行く人が「ナザレのイエス」だと聞くと、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください。」と叫び始めました。人々がバルティマイを叱りつけ黙らせようとしたのは、物乞いの声が五月蠅かったからではありません。「ナザレのイエス」を「ダビデの子イエス」と呼んだためです。

「ダビデの子」、この名称は来るべきメシアを指す言葉。滅多なことでは口に出来ない言葉だったからです。また別な意味では、私たちが真に主イエス・キリストの道に従おうとするとき、人々はそれを妨げようとするということです。

バルティマイの「憐れんでください」という叫びは、単に肉眼が見えるようになることを願っている叫びではなかったと思います。当時、病とは神の祝福から遠ざけられた者の徴、呪いに近いものでした。ですから病という重荷に加え、人間として疎外される苦しみをも担わなければならなかった。彼が町外れの道端に座っていたのは、町中に彼の居場所がなかったことを示しています。それ故、「憐れんでください」という彼の叫びは、何よりも神の愛の眼差しを求めていたのだと思う。

多くの人々から、「お前は神の呪いを受けた結果として、このように目が見えなくなったのだ」と忌み嫌われ、神にさえ見捨てられていると絶望を味わっていた彼が心から求めたもの、誰にも止めることが出来なかった叫び、それは、ただ神の憐れみの眼差しを求めてやまないバルティマイの祈りに他なりません。

そしてこの叫びは、バルティマイだけの叫びには留まりませんでした。11 章のエルサレム入城の際に、ホサナと人々が叫んだ、その先駆けの言葉となったからです。それだけではありません。バルティマイは主の招きの声を聞いたときに上着を脱ぎ捨てました。物乞いにとって上着は、道端に座るための敷物であり、施しの金をそこに置いて貰うための商売道具。夜にはそれにくるまって眠るためのマントでもありました。その上着を脱ぎ捨てるということは、もうひとの憐れみに生きる生き方ではなく、神の憐れみの中に生きる生き方、即ち、主イエスに従って生きるという明確な意思表示でもあったのです。そして、この行為はエルサレム入城の際に多くの人々が自分の服を主イエスの歩まれる道に敷いたという出来事の、やはり先駆けとなっていくのです。

神に向かって「叫ぶ」のはイスラエルの信仰の特徴です。旧約聖書には随所に主に向かって「叫ぶ」神の民の姿が描かれます。その叫び、つまり祈りが集められたのが詩編だと言ってよいでしょう。詩編の中では絶えず「主よ、なぜですか」「いつまでですか」「黙っていないでください」、「今こそ救ってください」という叫びに満ち溢れています。聖書の信仰とは、不正や悪、様々な試練を黙って耐えることよりもむしろ、神にその思いをぶつけていく、祈りの戦いの中に表されていくものだからです。

ですから何度も言いますが、このバルティマイの祈り、これがキリエ・エレイソンとして私たちが毎週礼拝の最初で祈る祈りなのです。私たちは主に向かって叫ぶことが許されている。そして、この祈りなくして、私たちは主の名を呼び求めることができないのです。主はこのようなバルティマイの叫びを、私たちの祈りを、聞き損なうことはありません。

「何をしてほしいのか」。主にそう問われたとき、バルティマイは自分の口から出た言葉に驚いたかもしれない。「先生、目が見えるようになりたいのです」。この言葉を直訳すると「私の先生、私は天を仰ぎたい（天に顔を向けたい）」という言葉です。それは他でもない、主イエスが私たちの愚かさのために十字架にお掛かりになり高く挙げられるそのお姿です。しかし、彼が見たのはそれだけではなかったでしょう。主が復活されたそのお姿をも見る事が許されたに違いない。

バルティマイは「私の先生（ラボニ）」と主に答えました。この言葉が再び登場するのは、復活の主イエス・キリストに出会ったマグダラのマリアの言葉（ヨハネ 20:16）です。言ってみれば、バルティマイは、マグダラのマリアのあの喜びの呼びかけを先取りするかのよう、主イエスに向かって「ラボニ」と呼びかけているのです。



十 人知ではとうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン